

井上泰宏(いのうえ・やすひろ)

1986年生まれ 37歳

福岡県北九州市出身。大学卒業後ボートレース関係の会社に就職。2015年から日刊紙記者として若松ボートを担当後、20年から芦屋ボートに常駐。趣味は釣り。車のシート下に餌が転がり込んだことに気づかず、しばらく異臭を放ち続けたのがトラウマ。

まくり姫の苦悩

1年間で調整中にペラを4枚割ってしまったと1か月の休みになってしまったという制度がある。それにリーチがかかってしまつて昨年7月から1月の途中までノーハンマーを貰った高田ひかる選手が3月に芦屋にやってきましたので、胸の内を聞いて来ました。スポーツ報知西部版の「ほっとらいん」というコーナーでも書いている(検

索すると出てくるのでぜひご覧ください)のですが、今回はそこで書き切れなかった部分をご紹介します。まず現実的ではなくても素直な高田選手の気持ちとして「割れないペラを作る工夫もしてほしい。極端みたいになっちゃうけど、みんなが平等になるように全員が電気炉でペラを焼くことができず、ペラを固くすることを禁止にするぐらいのこともしてほしい」

no.21

伸び型仕上げのまくり旋風



と、冗談含みではあるものの話してくれました。

仮にエンジンもペラも全く差がないとして、全員が同じ形ならコース、S力にターン力での勝負になり、これでもそれぞれの力量勝負となるでしょう。ただ、選手の個性が失われてしまう可能性は大きいです。高田選手もそうだし、菅章哉選手や昨年に最多勝を獲得した中辻崇人選手ら伸び型の使い手も、反対にピット離れを求める石川真二選手や江口晃生選手など深い起こし位置からでももつ足を求める選手らも同様です。独自の調整を施して人よりもエンジンを出す、飛び抜けた特徴を出すことを目指しにくくなってくるのです。「ペラ交換が多くなると製造が間に合わなくなってしまうからできたルールみたい」なので落とすところは難しいでしょうが、レースをするのはそれぞれの選手。選手ファーストがファンの楽しみ

にもつながる部分は大きいはずなので、多くの選手がルールが改善されていくことを望みます。

ポジティブに探求を

ペラを叩かないという選択をした高田選手は「自分らしいレースもしたかったけど、慣れない状態で走らなきゃだし勝率は落ちてしまった」と影響を受けてしまいました。が、「乗れる幅や整備の幅は広がりました。一選手としては成長することができたと思います」とあくまでポジティブに受け止めています。それと同時に「叩かなかったことでのブランクも感じています。叩いていないと旬の調整ができない。叩き始めの児島では調整がいきなりはまったから優出をすることができたけど、その後は迷子になってしまいました」とペラ調整の難しさも改めて痛感しています。「子どもの頃から色々なことを知りたくて『なんで?』

高田ひかる





藤山雅弘



藤山翔大

としか言わない子だったみたいで
す。『聞いてばかりでうっとう
しい』と言われるようなタイプで
した。今でも『何で伸びひんの？
何で？』と思っずとやっていま
す(笑)』という高田選手の思考
は後ろを振り返ってばかりでは
いられず、常に前を向いています。
「面白いことは何でも好き。気が
向くままに面白いと思う方に流
れてきました。私の性格として誰
かに勝ちたいとかはあまりないん
です。対相手というよりも、自分
の知識欲を満たすためにやって

るみたいなどころがあります。知
識が広がったらいレースができ
て、いいパフォーマンスにつな
がる。勝ちたい！ よりもその気持
ちの方が強くて、それで結果も
ついてくれば最高にうれしいん
です」。その日の作業終了後に話
しを聞かせてもらったのですが、話
している最中も調整を試みたくて
ウズウズしているように見えるほ
どでした。

そんな高田選手は藤山翔大選手
のペラをモデルに改良を進めて自
身の物としてきたのですが、同じ
シリーズでは藤山翔大選手の兄・藤
山雅弘選手が走っていてかなりの
好パワーで盛り上げてくれました
た。それもあって高田選手は「藤
山雅弘さんにアドバイスをもらっ
て、藤山翔大さん寄りではありま
すけど、藤山兄弟のハイブリッド
ペラです」とその節の課題だった
足の改善に成功。苦しい一節
間ではありましたが、最終日は連
勝で締めくくりました。何かしら
のきっかけをつかむことはでき
たのではないのでしょうか。ま
くり姫の本格的な復活はすぐそこ
でしょう。楽しみにしています。

梓番にとらわれることなく

その次のシリーズでは藤山翔大
選手が芦屋に参戦し、こちらも盛
り上げてくれました。前検の段階
で新ペラに換わったことで存分に
調整ができた様子で、初日から明
らかに節イチの伸びになっていたの



増本杏珠

ですが、「ペラで無理に來させて
いる感じで満足はできていない」
と最後まで調整の手を緩めること
はありませんでした。チルト角度
も「どのチルトでも全部まくるつ
もりで攻めるレースは変わらませ
ん」と0.05、1.0、2.0、3.
0と5パターンも試しました。藤
山翔大選手と言えば伸び型ですが、
伸び型のまま前付けに動いたり
多彩な戦法が個性のひとつ。ただ
「最近では安定板が付いた時とイン
の時以外は調子がいいんで、イン
にこだわらず行きたい」と語った
通りに、初日と4日目に巡ってき
た1号艇でもインに固執すること
はなく、ともに3コースでカドに
引いて1着をゲット。もちろん決
まり手はまくりでした。進入から
予想の組み立てが難しくはなりま
したが、だからこそ面白かった。
今回は伸びに特化した選手の話が
多かったですが、仕上げ方だけ

はなくターン力もS力も含めてポ
ートレーサーとしての個性にはや
はり惹きつけられるものがありま
すね。
藤山翔大選手の2度目の1号艇の
時、インに入ったのは134期で
地元の増本杏珠選手でした。3コ
ースまでしか入ったことがなかつ
たのですが、展示から「あれ？
私がインですか？」という並びに
なりコース取りには迷いもあつた
ようですが、本番までには「行っ
てしまえ」と腹をくくって初のイ
ンコース戦に。前述の通り藤山翔
大選手に敗れ、結果は伴わず悔し
がっていました。そんなレースを反
省しながら振り返り、それでも「楽
しめました」と笑顔も。2期目の
今期に水神祭を飾ったばかりなが
ら勝率は大きく上昇。肝も据わっ
ており、大化けするのも近い未来
の話かもしれません。